宇佐八幡は なぜ天皇家の祖廟か

安部和也

全国いたる所に八幡社が祀られており、一説には四万社（『八幡信仰』）ともいわれている。別府市内の八幡社は、朝見八幡・竈八幡・天間八幡・内成の大神峯神社の四社である。（八幡石垣社と東山八幡は除外する。その理由は「まとめ」の項に記す）

全国八幡社の本宮の宇佐八幡宮は、皇室より天皇家の始祖神を祀る祖廟として、伊勢神宮に次いで崇敬されている。

伊勢神宮は、『古事記』『日本書紀』に記されている皇祖天照大御神を祀っているので、祖廟といわれるのは判るが、宇佐八幡宮が第二の祖廟といわれるのはなぜだろうか……？

宇佐八幡の祭神で、天皇家の始祖神にあたる神は、一体どの神だろうか……

祭神は、一の御殿が八幡神（八幡大菩薩）のホムタワケノミコト（応神天皇）。

二の御殿が、比売神の宗像三女神（タギツヒメ・イチキシマヒメ・タギリヒメ）。

三の御殿が、オキナガタラシヒメの神功皇后となっている。

応神天皇（ホムタワケノミコト）は、『記紀』による十五代の天皇。宗像三女神は、皇祖神天照大御神と弟神スサノオノミコトとの誓約によって生まれた、タギツヒメ・イチキシマヒメ・タギリヒメの三女神である。

神功皇后は、応神天皇の母君にあたらせられる。

宇佐八幡が、祖廟といわれだしたのは何時頃のことで、その根拠はなんだろうか……？

八幡信仰研究の大権威者中野播能氏は、八幡大菩薩が天安三年（八五九）二月二日に「我今帝（清和天皇）を守護し奉らんとして京都に座し……朝廷を守護し奉る……」との託宣によって、岩清水八幡宮の勧請が勅名によって行われたと、著書に記されている。

ということは、文徳天皇の第四皇子であった九歳の惟仁親王（清和天皇）が、上の皇子をさしおいての即位を祈願し、無事即位（八五八年）出来たことに対しての、「御礼」に岩清水の勧請が行われたとおもわれる。

また中野氏は、白河天皇（一〇七二）は岩清水を國家の祖廟とし、八幡大菩薩を鎮護國家の霊神として除病延命を祈られた。鳥羽（一一〇七）・後白河（一一五五）両天皇も、岩清水に深く信仰をささげられ、永久元年（一一一三）の御願文には「大菩薩は國家の宗廟と御坐て」と記されている。これによって岩清水八幡は、伊勢宗廟に次ぐ宗教的権威を得たのだとも記されている。

八幡大菩薩が皇室の崇敬を受けたのには、託宣による奈良大仏の鋳造（七四九）、道鏡の奸謀阻止（七六九）、平将門・藤原純友の反乱の鎮圧（九四一）等の成功に対する謝恩によるものと思われるが、特に皇位継承に係わる託宣（道教事件・清和天皇の即位）に重きがおかれたものとおもえる。

祖廟として、皇室より崇敬されたのは岩清水八幡であったのが、岩清水の元宮宇佐八幡も岩清水と同じく祖廟として崇敬されだしたと考えられる。

祖廟といわれた八幡大菩薩はいかなる神か……

神様である八幡神が、なぜ仏法に帰依して八幡大菩薩となったのか。

小山田社の八幡神が小椋山の新社殿に移るには、八幡神自身も新たに生まれ変わらねばならなかった。そのため八幡神は、「護國霊験威力神通大菩薩」を名乗り変身した。それは、聖武天皇の國分寺・東大寺大仏の造立によって、仏教が國教として統一されたので、今までの弥勒の八幡信仰も、必然的に観音の八幡信仰に変わらざるを得なかった現象であろう。（『八幡信仰』）

八幡神を大菩薩にしたのは、僧法蓮といわれているが…？

八幡神は、宇佐國造氏（ウサツヒコ・ウサツヒメの子孫）が祀る「比売神」、渡来氏族秦系辛島勝氏が祀る「辛國の神」、大和大三輪系シャーマン大神氏が奉ずる「応神天皇の神霊」、辛國神と応神神霊が合体して誕生した「新たな神」ともいわれているが、八幡神はシャーマニズムの託宣をだすシャーマンの神で、なくてはならなかった。

八幡神とは、八幡宮の前身鷹居社の創建（後記）を考えると、辛國神と応神神霊とが合体させられて、誕生した「新しき神」と見るべきである。

比売神は、一の御殿の八幡神とは別に、二の御殿の祭神として祀られているので、八幡神とはいえない。

辛國神は渡来神で、いくら辛島勝氏が勢力を持っていたとはいえ、皇祖タカムスビノ神を祖神とする宇佐國造氏を、開発領主と仰ぐ宇佐國の先住族（倭人）は、國神（土地神）をさしおいて渡来神を氏神とすることに、同意はしなかったとおもえるので八幡神とは言い難い。

宇佐國の領主宇佐國造氏は、「磐井の乱」（五二七）で磐井に組して大和政権に反抗したため、山奥（安心院か）に蟄居させられた。宇佐國造氏が去った後の宇佐は、辛島勝氏の渡来文化が既存の宇佐國造文化を駆逐したため宇佐國造氏の主流は、遠賀川流域の水沼氏の元に落ち延び、その他は山岳に入って山岳宗教を積んだといわれている。

かって宇佐國造氏が、本拠地としていた宇佐川の東岸鷹居に、崇俊五年（五九二）辛島勝氏は辛國神の宮柱を立てた。（宮柱とは神が降臨するための「依り代」）ということは、六世紀末には宇佐國造氏は宇佐の地を離れていたことになる。

応神信仰を奉じた大三輪山系（國神オオモノヌシノカミを祭神とする大神神社）シャーマン大神比義が、宇佐に乗り込んできた時期は定かではないが、岩清水文書「大神田麻呂解状」より計算すると、比義は敏達一二年（五八三）に宇佐に入ったことになる。

大神比義が宇佐に入ったのは、通説では辛島勝氏の高度な文化を蘇我氏が利用するためとなっているが……。

雄略天皇が病気の時、物部氏は豊國奇巫を宮中に參内させて天皇の病気を全快させたように、豊國のシャーマン（辛島氏）と物部氏とは、既に関係が樹立されていたと考えられるので、蘇我氏はむしろ物部氏と辛島勝氏との関係を絶つために、大神氏を宇佐に派遣したと見るべきであろう。

当時の物部・蘇我の両氏は、仏教問題で対立し崇仏派の蘇我氏と排仏派の物部氏とが権力争いをしていた時代なので、如何に中央では豊國の辛島勝氏を高く評価していたか、このことで想像できる。

宇佐の官社認定問題で、辛島勝氏は辛國神を、大神氏は応神神霊を、それぞれが主張して譲らず、その対立は熾烈を極めた。

僧法蓮（大和政権によって派遣された医術僧）によって、辛國神と応神神霊とを合体させた八幡神を誕生させ、鷹居社に祀ること（八幡宮の創始）で妥協が図られ、新しき八幡神が誕生したのである。鷹居社の八幡神は、小山田社・小椋山と移転して現在の宇佐八幡宮となった。

以上のように、皇室の祖廟八幡大菩薩の誕生に係わったのは、大神氏と辛島勝氏と僧法蓮で、宇佐國造氏は関係していなかった。

そうすると宇佐國造氏の氏神は、どうなったのであろうか……。

宇佐國造氏の祖神は、初めはタカミムスビノカミであったのが、大和政権時代には『先代旧事本紀』（各氏族・各地に伝承された史書）「天孫本紀」によれば、アメノミクダリノカミとなっている。

ということは、天皇の皇祖神であるタカミムスビノカミを、臣家の祖神とすることは許されず、やもえず孫のアメノミクダリノカミを祖神としたのではなかろうかと想像されるが。そのアメノミクダリノカミは、現在の宇佐八幡二の御殿に比売神（宗像三女神）として祀られている。

辛島勝氏の渡来文化に、追われ宇佐の地を離れた宇佐國造氏の跡は、宗像神を祖神とする下毛宇佐氏（豊前海氏）が、辛島勝氏との取引によって宇佐氏を嗣いだ。（宇佐國造氏の宇佐君氏と下毛宇佐氏・後の法蓮系宇佐

公氏とは同じ宇佐氏でも別系統が考えられる）

宇佐の官社認定で誕生した八幡神が、鷹居社・小山田社を経て小椋山に鎮座（七二五）してから八年後（七三三）に、宗像三女神は比売神社として八幡神宮の二殿に併祀されたのである。

宇佐國造氏の祖ウサツヒコノミコトは、宇佐祖神社として摂社（土地神）に祀られている。

一、応神信仰

応神（ホムタワケノミコト）天皇が、最初の人格神として何故宇佐に祀られたのであろうか……。

出自については、神功皇后の三韓征伐に胎中天皇として従軍し、九州で生まれたことだけで、一説では父君も定かでないが、九州の豪族の出で祖先は外来氏族との説がある。

御母神功（オキナガタラシヒメ）皇后に従って大和に帰還（応神天皇の東征）の途中、仲哀天皇の皇子に抵抗されたが、それを撃ち破って河内に上陸、大和を征服して河内王朝を成立させ、後ヤマトをも征服統一して天皇となった。（大和は現奈良県、ヤマトは九州から関東を指す）

生前の本人の業績によって贈られる諡号（称号）で、「神」の一字が贈られているのは初代神武天皇（ハツクニシラススメラミコト）・一〇代崇神天皇（ハツクニシラススメラミコト）・一五代応神天皇（ホムタワケノミコト）の三人だけである。

神武天皇以下九代開化天皇までの天皇は、架空の創作された天皇で初代の大王（天皇）は、九州から東征して大和政権を樹立した崇神天皇とみるのが定説となっている。

応神天皇も九州から東征してヤマトを統一した天皇で、現在の天皇家の始祖とみられている。

神武天皇の東征神話は、崇神天皇と応神天皇の東征実話をモデルにして作られたものであるといわれている。

日本天皇陵のベスト三は、河内に造られた河内王朝の巨大古墳の仁徳天皇陵・応神天皇陵・履中天皇陵で、それは河内王朝が如何に巨大な権力を備えていたかを証するものである。その偉大なる河内王朝の始祖の応神天皇

と、倭國として始めて海外に進出した御母神功皇后とを、母子神とした母子信仰が九州で発生、大和で応神信仰となったものと考えられる。

八幡大菩薩は、応神の神と辛國神とが合体した八幡神であったはずなのに、何時頃か応神八幡と単独でいわれるようになった。

天平勝宝元年（七四九）に、八幡神に一品の叙位がありこの叙位は、八幡神は応神天皇の神霊であるとの前提にもとづいたものと考えられている。また、弘仁一二年（八一一）の官符に「件大菩薩、是亦太上天皇霊也」とある。

以上のように八幡大菩薩は、おそくとも八世紀中期には応神八幡神であると考えられていたようである。

宇佐八幡宮の神殿の配列は、神殿に向かって左より応神天皇を祀る一の御殿。真中が比売神を祀る二の御殿。右側は神功皇后を祀る三の御殿となっている。一般的な上座下座の常識で御殿配列を見た場合、上座は真中の比売神。次の座は右側の神功皇后。下座が左側の応神天皇となる。この配列は、比売神（祟り神）を応神・神功の両神で封じ込めたものであるとの説もある。

天子南面して東に座す。南に向かって東側が上座、太陽の出る方が上座と古くより考えられている。この考え方による上座は三の御殿。次の座は二の御殿。下座が一の御殿となる。

最も一般的な見方をすると、応神神霊（八幡神）は宇佐八幡宮の主祭神として配列されていないのは一体どうしたのだろうか……。

宇佐八幡の正式な呼称（延喜式）は宇佐神宮で、八幡大菩薩宇佐宮と、比売神社と、大帯姫廟神社のそれぞれ独立した三ケ所の神社を総称したものである。

各殿は、小椋山に南面して八幡造りで並び建ち、西より一の御殿、二の御殿、三の御殿と称し、神亀二年、天平元年、弘仁一四（八二三）年の造立と伝えられている。比売神（後記）を配祀神として神社に奉斎するに当たっては、第一殿を主祭神の鎮まり座す御殿とし、第二殿以下を配祀神の殿舎とすると決められているので、宇佐神宮の主祭神は、第一殿の応神天皇である。

二、辛國神

辛（韓）國とは、現在の朝鮮半島南部をさしている。辛島勝氏が新羅系渡来氏族秦氏の一族といわれているので、奉ずる辛國神は新羅神であろう。

『日本書紀』には、秦氏は百済系とされているが、香春の銅の精錬の事実から、古代日本の銅の採鉱・鋳造技術は、新羅系秦氏が統括していたとの文献（『秦氏の研究』）より、辛島勝氏を新羅系と考えた。

秦氏は、中国系（秦の始皇帝）を祖先に持ち、新羅を経て新しい文化を日本に持ち込んだと伝えられている。

日本で、神社が造られ神主によって祭祀が行われようになったのは、古墳時代以降と考えられている。それ以前は、自然の全てに霊が宿っているとの考え方（八百万の神）の、精霊崇拝が行われていた。原始の信仰には、神と人間の間に神の命令を聞いたり、神に祈りを捧げたりのために、中継ぎ役のシャーマン（巫女）が必要であった。

『魏志倭人伝』に、卑弥呼は「鬼道につかえ、よく衆を惑わす」と記されておる。この中国でいう鬼道とは、シャーマンによる託宣（神のお告げ）が全てを決していたシャマニズムのことであろう。シャーマンの神は、北辰（天子の座す所、又北極星を指す）神で、道教の最高神ともいわれている。邪馬台國及び宇佐國は、紀元前二〇七年除福によって日本に持ち込まれた、と思われる中國の道教思想（信仰）の影響下にあったと考えられる。

秦氏の奉ずる辛國神（シャーマニズムの神・北辰の神）を、僧法蓮は「北辰神も応神神霊も全く同体の弥勒神である」といって、「八幡神」誕生させている。辛國神は、『承和縁起』に「…宇佐郡辛國宇豆高島天降 座…」とある。

応神神霊も『承和縁起』に欽明天皇の御代に、「宇佐郡辛國宇豆高島天降座」と。また「…右大御神者品太天皇御霊也…」と記され、辛國神も応神神霊もシャーマンの神で、降臨したのも同じ辛國村の地であった。『承和縁起』は、僧法蓮と同じく辛國神と応神神霊は、同体との考えにもとずいて記されている。即ち「万世一系」の天皇の神霊と、渡来人の神とが同体という考え方が、承和年代（八三四～八四七）に通用していたということは、

応神天皇（ホムタワケノミコト）は渡来氏族の出であると、考えられていたことになる。

天武天皇（六七三～六八六）によって「皇位」は、皇祖天照大御神より万世一系であると定義づけられていたのに……。

三、二の御殿の祭神比売神について

比売神の実体は、神武天皇の御母タマヨリ姫とか、宗像三女神とか、シャーマンの神とか、邪馬台國の卑弥呼だとの説もある。

応神信仰の項で記した様に比売神とは、定義では「単なる御前（女神の神号）の神として、神社に祭神として奉斎するに当たり、主祭神に副へて祀る神をいう。第一殿を、主祭神の鎮まり座す御殿とし、第二殿以下を配祀神の殿舎としている」となっている。

現在二の御殿の祭神比売神は、宗像三女神となっている。『宗像神社史』には、次のように記されている。

「天照大神は三女神を生み、これを葦原中國の宇佐島に天降らせ、その道中にいて、天孫を助け奉り、天孫に祭かれよとの詔を下した……」

神勅を要約すると、「天照大御神は宗像三女神に対して、三女神は先ず道の中即ち九州北辺の地に天降り、天孫の大業を輔翼して、天孫より手渥い奉斎を受けさせられよ」と仰せ下さったのである。

また、三女神の降臨の地を「はじめ豊國の宇佐島に天降られたが、後海北道中（三韓往来の道中）に遷られた」との説もある。神話によると、天照大御神とスサノオノミコトとの誓約によって、天照大御神より生まれた三女神はスサノオノミコトの子、スサノオが生んだ五男神は、天照大御神の子となっている。

『日本の歴史』のスサノオノミコトについての文中に、「宇佐」の地名が次のように記されている。

「スサノオ。彼は西暦一二〇年頃、出雲の國に生まれた。当時人々がヤマタノオロチと呼んで恐れていた豪族を討伐して、一躍出雲の覇者となった。……こうしてスサノオは、日本列島の開拓と統一にという見果てぬ夢に向かって邁進する。

瀬戸内海航路の掌握。山陽道から近畿地方へかけての

遠征。そして九州の制覇。彼は日向のイザナギ一族を降伏させると、大分県の「宇佐」に九州統治の都を置き出雲から筑紫にまたがる大國の王となった」と。

出雲オオクニヌシノカミの國譲りの神話から、ニニギノミコトの降臨前の葦原の中つ國は、スサノオ一族が統治していたとは考えられるが。

出雲大社（スサノオの子孫・オオクニヌシノカミが祭神）と宇佐八幡は、二拝四拍一礼の作法で参拝する。この作法は日本國中の神社の中では、出雲と宇佐のみである。（この作法は、「祟り神」に対する拝例作法との説があるが。）

また、宇佐八幡二の御殿祭神宗像三女神の親は、スサノオノミコト。出雲大社の祭神オオクニヌシノカミの祖先もスサノオノミコトである。また、スサノオは、新羅より出雲に渡来（『日本書紀』）しており、辛國神も新羅よりの渡来神が考えられる。福井県と岐阜県に新羅神社がある。祭神は両神社とも主祭神はスサノオノミコトとし、八幡大神とかオオクニヌシノカミを副祀している。

宇佐と出雲と新羅は、なにか特別な関係があったのではなかろうか。古代史研究者安本美典氏（産能大学教授）は、邪馬台國卑弥呼のことを神話的に伝えたのが、天照大御神であるとされている。

古代の天皇在位年数は、一代約一〇年（奈良朝七代・七〇年）とすると、神武天皇活躍年は二八六年前後となる。それより五代（五〇年）前の天照大御神の時代（二三六年）と卑弥呼時代（二四八年）とが重なりあう。安本氏の説に従うと、二の御殿の祭神比売神は卑弥呼で、神話の天照大御神になる。（大御神の表現はシャーマンを意味するとの説がある）

四、三の御殿オキナガタラシヒメ（神功皇后）

宇佐八幡宮は、八幡宮と比売神社の二社であったのが、弘仁一四年（八二三）にオキナガタラシヒメが大帯姫神社として併祀された。併祀の理由は種々の説があるが、天武天皇によってそれまでの各地各氏族に伝承された歴史を、一つに統一した歴史の編纂『日本書紀』（七二〇）が作られた。

この『日本書紀』の一書には、「神功皇后は卑弥呼」

であると記されている。

それが最大の理由と思えるが……。

大和政権を樹立したのは、九州から東征した邪馬台國であると、多くの人々（考古学者を含む）に信じられている。

神功皇后の活躍年代『日本書紀』紀年（干支で記す）によると、神功皇后が攝政になった年は攝政元年辛巳歳（二〇一年）で、崩御されたのは攝政六九年己丑歳（二六九年）となっている。卑弥呼が死んだ二四八年と、神功皇后との死亡時のずれは約二〇年となる（「好太王碑」に記されている三韓征伐は三九一年とあり、年代差は百数十年となる）。『日本書記』の編纂者達は、卑弥呼は神功皇后で、邪馬台國が東征して大和政権となつたと考えていたことがうかがえる。

宇佐八幡宮が建っている小椋山は、前方後円墳で昭和一五年の社殿造営の時、三の御殿の真下に埋められていたという石棺が発見された。それは卑弥呼の墓に間違いなかろうとの推測が噂となって広まり、それに併せて百体古墳は、卑弥呼に殉死させられた奴卑の古墳であると想像された。赤塚古墳よりの出土の三角神獣鏡をも併せ考えて、石棺発見の噂は邪馬台國宇佐説にまで進展した。

小椋山は卑弥呼の墓場との説に、考古学者原田大六氏は次のように否定している。

「小椋山は考古学上前方後円墳とは認められず。まして三の御殿下の石棺発見のニュースは、大正一〇年前後の噂が、二千六百年祭当時（昭和十五年）の話に置き換えられている。もし石棺が事実であったならば、オキナガタラシヒメ廟神社として併祀された弘仁一四年（八一三）当時の、神功皇后の御霊を納めた石造物とみられる」と。

宇佐八幡が建っている小椋山を聖地（廟）とみるならば、馬城嶺を御神体とした宇佐國造氏は、小椋山に遥拝所を設け「より代」を立て神の降臨を仰いだ聖地で、あったとみるべきであろう。また、宇佐國造氏の祖ウサツヒコ・ウサツヒメの、墓所とも考えられる。神功皇后も、卑弥呼と同じシャーマンであったことは、『日本書記』に次のように記されている。仲哀天皇は、香椎の宮で熊襲征伐を諮ったところ、神功皇后は神がかりして「西の

方に國がある。その國（新羅）は金銀財宝が沢山ある。その國をそなたに服属させてあげよう」との神託を、シャーマンの巫女神功皇后の口を通して、神のお告げを言わせている。

『日本書紀』垂仁記によれば、「三年（二一四）春三月、新羅國王の子ヒボコが帰化した」と記されている。このヒボコが金属精錬技術集団を率いて渡来したことは、あらゆる角度から推定されている。ヒボコの六代目の孫タカヌカ姫とオキナガスクネとの間に生まれたのがオキナガタラシ姫・神功皇后である。

香春鉱山には、辛國オキナガ大姫大目神社があり、その祭神は神功皇后が考えられており、神功皇后は香春地方の出身といえる。

宇佐は邪馬台國の宇佐か

旧書にでてくる「倭」について記してみる。

『漢書』地理志「夫れ楽浪海中に倭人有り、分かれて百余國を為す」（弥生時代中期）。『魏志倭人伝』「旧は百余國、漢の時朝見する者有り、今使役通う所三〇國」と、「邪馬台國には五万余戸がある」と記されている（三世紀中期）。また、『後漢書』倭伝「倭は韓の東南の大海の中に在りて、山島に依りて居を為す凡そ百余國。武帝が朝鮮を滅ぼして自り使訳、漢に通ずる者三〇許の國なり」（五世紀中期）と。

安本美典氏は、邪馬台國は北九州筑後川全版図としていたが、登与（壱与）の時代に豊前國京都付近に移ったと考えられ、その勢力は東に移り大和政権となった。「豊の國」の地名は、人名の登与に関係しているとも考えられると述べている。

後邪馬台國の都を安本氏は、豊前國京都と考えているが、当時の宇佐は海人の基地、即ち豊予海峡から瀬戸内海へ、そして吉備を径て畿内に行く時の、また、関門海峡を抜けて北九州・朝鮮へ行く時の、ルートを掌握出来る一大根拠地であったと考えると、邪馬台國の都を京都より宇佐とした方が、『魏志倭人伝』の邪馬台國五万戸の線に添った見方とおもえる。

狗奴國との戦いに敗れたとはいえ、海上交通網を掌握していた邪馬台國は、余力の海軍力と経済力で新天地を

求めて東進（東征）を行ったと考えると、大和政権は九州宇佐を出発地として発足したといえる。

また、古代史研究者水野祐氏は、邪馬台國との戦争に勝った狗奴國は、九州を征服東征して大和政権を樹立したとしている。

日本の古代國家の成立の解明を目的とした大和古墳群学術発掘調査で、奈良ホケノ山古墳の築造年代は、中國の文献による邪馬台國が存在した時期の三世紀前半の前方後円墳と判った。このことは、初期大和政権が邪馬台國の東征によって成立したものであることに、一歩近か付いたと評価されている。

「天神」の日本征服

『記紀』による日本國の成立（大和政権の樹立）は、日本神話の天神（高天原よりの降臨族）が日本に渡来して、そこに先住していた國神（縄文人）を征服して、統一國家を造ったとなっている。

天神は、ニニギノミコトに引き連れられて、高天原より九州に渡来した最初の大陸系集団と考えられているが、それ以前にもスサノオが、新羅から出雲に渡来（『日本書紀』）している。

また物部氏の祖神ニギハヤヒノミコトも高天原（新羅か）から河内に降臨（『先代旧事本紀』）していたことが記されており、『日本書記』に記されておるナガスネヒコの「帰順」は、大和はニギハヤヒの子孫が君臨していたことを表している。

ニニギノミコトの降臨の地が「日向の襲の高千穂の峯」と「筑紫の日向の高千穂のクシフルノミネ」との二説の学説がある。高千穂の峯の場合は、中國揚子江下流の江南地区より笠沙の岬に渡来した江南族が考えられ、クシフルノミネの場合は南鮮（任那）より北九州に渡来したと考えられている。（『騎馬民族國家』）

いずれにしても、中國の内乱を逃れた王侯貴族は、戦闘技能集団を含む一族を引き連れ、食糧（種子を含む）を携えたある集団は東シナ海経由で、また別の集団は朝鮮半島経由して共に九州に逃れついたものと想像される。

彼等の高度な文化と強力な軍事力は、たちまちにして先住縄文人を征服して彼等の小國家を形成させた。

その彼等の中で、大和に進出して國家統一を果たしたものが大王（天皇）となった。これが天皇家の起こりと考えられる。

『記紀』による万世一系の皇統も、戦後の歴史学では崇神・応神・継体の各皇統の存在が認められつつある。応神八幡の応神天皇は、万世一系の皇統には入らない九州の豪族の出で、その祖先は渡来族との見方が有力である。

韓神（かんしん）

宮内省内には、韓神「園神（モ）社・韓神社二座」が祀られている。園神は南殿に韓神は北殿に祀られ正三位の神格が授けられていた。

韓神は、高天原を追放されて出雲に降臨したスサノオノミコトの孫神（古事記）で、朝鮮の神と解釈されている。『神道大辞典』によれば、園神はオオモノヌシノカミ（韓神の兄）。韓神二座はオオナムチノカミ（オオクニヌシ）とスクナヒコナノカミ（渡来神）の出雲國造りの神となっている。

韓神祭は年二回行われ宮中よりは内侍（ないじ）。太政官より参議以上が参列するほど重視された祭儀であったが、鎌倉時代より衰微したようである。

『日本書紀』「崇神紀」によると、宮殿内に並んで祀られていた天照大御神とヤマトオオクニタマノカミ（オオモノヌシノカミ・韓神の兄）の二神は、お互いの神威を恐れ日々不安に過ごされており、それが祟りとなって疫病が蔓延して、多くの民を死亡させたので、崇神天皇はそれを憂いて、天照大御神を皇居より倭の笠縫邑（かさぬいむら）にお移しになられた。その後垂仁（すいじん）天皇によって、天照大御神は伊勢に遷座（せんざ）されて伊勢の大神宮となった。

皇祖神天照大御神は、皇居内より追放されているのにもかかわらず、出雲系の神々が宮城内に祀られておることは、崇神天皇が出雲の神々による國譲りと、大和の産土神（うぶすなかみ）（土地神）は出雲の神々であると認めた上、天照大御神を皇祖として認めなかったのではなかろうか。

『記紀』による天皇家の祖先ニニギノミコトが、高天原より葦原の國に降臨したという神話の高天原は、実際は韓（辛）國のことで、祖国の神（韓神）を祀ることは

子孫として当然のことで、これを考えると天皇家の祖国も、宇佐辛島勝氏の祖國も同じ辛國であるといえる。

宮内省に祀られている韓神三座の祭神は、出雲國の神のオオモノヌシノカミ・オオナムチノカミ・スクナヒコナノカミとなっており、この三柱の神は大神神社（三輪山）の祭神としても祀られている。

桓武天皇の御代（七八一～八〇六）宮中に祀られていた韓神三座は、宮殿造営のため他の地に社を遷つそうとしたが、「鎮護皇家」の神託があったので、旧地のまま宮内省所祭神にしたという。（古事談）

貞観元年（八五九）正三位が叙せられ「延喜式」制では名神大社にされたという。

応神天皇と宇佐

宇佐八幡の祭神応神天皇の祖先は渡来人で、母君神功皇后も渡来人新羅國王の子ヒボコの七世の孫に当たることは前に記した。

八幡神は元々は、倭人の信仰神ではなく渡来氏族の信仰の神であった。その渡来信仰の象徴として応神天皇が考えられ、八幡神の誕生の地宇佐に八幡神応神天皇が祀られたものと考えられる。

宇佐八幡の「白壁に朱塗り柱」の建造様式は、朝鮮半島の建造物に共通しているといわれ、宇佐八幡が朝鮮半島系の信仰神であることを裏付けたものであろう。

奈良時代には、応神天皇を天皇家の始祖神と考えていたことは、國家に係わる事件には伊勢神宮ではなく、宇佐八幡に神託を求めていたことで想像される。その応神天皇が、古代の先進地の畿内・出雲・吉備・筑前ではなく宇佐に祀られているということは、八幡神の誕生地であるということだけでなく、応神天皇自身が宇佐と特別な関係にあったことが考えられる。

『宇佐八幡宮託宣集』には「応神天皇は大隅國の辛國城で降誕した」とある。また、『記紀』では応神天皇は、「日向國の美人髪長姫（隼人）を召した」とあり、応神天皇（ホムタワケノミコト）が「隼人國の出」を想像させる記述となっている。

応神天皇が隼人國の出となると、その祖先は長江下流江南地域から隼人の地域に渡来（神話ニニギノミコトの

降臨）した海人族が考えられ、八幡神の「幡（はた）」とは海人の象徴である船の帆を表したもので、その名の八幡神は、江南の海人族の守り神であったとも考えられる。

応神天皇の東征には、豊國の海部氏（あまべし）の協力と、彼等海人の根拠地宇佐からの出発が考えられるのは、応神天皇が海人族の出身で隼人に関係があったからこそとも考えられる。

五世紀の始め頃、ホムタワケなる人物が九州より船出して河内に上陸、時の大和王朝を征服して河内王朝を樹立させた。彼ホムタワケは、九州から関東に至る國々を征服統一して、ヤマト國の大王（天皇）となり応神天皇となった（古代史の通説）。

このホムタワケノの東征・ヤマトの統一には、宇佐を根拠地としている豊國の海部氏（海人）の協力がなければ実現出来なかったと思えるし、応神天皇の統一國家実現に占める宇佐の地は、いかなる地にも優る関係の地と判断されていたのであろう。

まとめ

天皇家の祖先が渡来人で、宇佐八幡の主祭神が渡来人の信仰神であったからとて、驚くことはない。

以前、時の総理が「日本は古代よりの単一民族國家である」と発言して物議をかもした事が思い出される。日本列島の先住人を縄文人と呼び、弥生時代の住人を総称して「倭人」と呼んでいる。

日本列島は、縄文時代の末に中國大陸や朝鮮半島から、多数の渡来人が集団で移住して来たため、先住の縄文人は次第に東北方面に追いやられたとの推論は、古代史の通説となっている。現代の日本人の祖先は、縄文人と渡来人との混血によって作られた倭人（弥生人）であるとの説は正しいものとして認められている。

渡来人を祖先に持つホムタワケは、豊國の海部氏の協力援助によって東征を実現し、九州から関東に至る國々を平定統一して、倭國（日本）の応神天皇となった。

渡来人によって持ち込まれた大陸系の信仰神（辛神）が、倭神（八幡神）として生まれ変わったのが宇佐の地であり、八幡信仰の象徴の応神天皇が日本統一えの出発

地も宇佐であった。

この二点が、宇佐の地に八幡神が祀られた根拠と考えられる。

天皇家の始祖は、奈良時代には応神天皇と見られていた（前記）ので、応神天皇を主祭神とする宇佐八幡が「天皇家の祖廟」として、皇室及び国民より崇敬されたのであろう。

別府の八幡石垣社と東山八幡社が、祭神に八幡神の応神天皇（ホムタワケ）を祀っていないので、天皇家の祖廟としての宇佐八幡の末社とはいえないのである。

八幡石垣社は、宇佐八幡系若宮八幡社で祭神は、神功皇后・比売神と応神天皇の御子四神となっており、東山八幡社の祭神は、仁徳天皇外二柱となっている。

県下には八幡神勧請の神社は六一六社で、内五九社は旧速見郡内にあるとなっているも、由緒明白なのは二一社で、創建は奈良時代が三社、平安時代か九社、鎌倉時代が五社、室町時代が一社、徳川時代が三社と記されている（『大分の神々』）。

参考資料

『八幡信仰』
『日本書紀』
『日本の歴史』
『万世一系の天皇家』
『天皇家と卑弥呼の系図』
『物部氏と蘇我氏と古代王権』
『古代日本と海人』
『邪馬台國は東遷したか』
『卑弥呼の墓』
『大和朝廷』
『騎馬民族國家』
『宗像神社史』
『日本古　代國家の成立』
『ヤマト國家成立の秘密』
『邪馬　台國』
『逆説の日本史』
『日本歴史大辞典』
『神道辞典』
『大分県神社名簿』
『大分の神々』